

## 思ついたこと……大会印象記にかえて

黒崎八州次良

本年一〇月四日から六日には「憩いの村庄内」で山形大学の岩本、大川、木村などの諸会員のお世話で、大会がもたれとてもとても楽しい数日を過ごすことが出来た。私どもは深く感謝しているものである。

さて、大会印象記である。討論がこれからというところで、去りがたい思いを抑えながら帰途について次第である。しかしまだ報告や質疑、討論を拝聴しながら、それを契機として日頃曖昧に考えていることが形を少しづつなくしてくることもある。有難いことである。

少し前から次のようなことを考え始めていたのである。それが事務局を勤めさせていた頃から、次第に形をなしてきたのである。まだ「海のものとも、山のものとも」と言うところであるが、その一部を述べることで、この度の責めに代えさせていただきたい。委員会の際に上京する。そのたびに何かに出会う。例えば、長谷川会員が「岩手県のある行政村では最近ようやく「部落」を設置したのですが……」……そうすると、最近に至るまで部落がない行政村が存在していたと言うことになる。いったい何が部落に代わるものであったのか。中村吉治先生などの「村落構造の史的分析」においても戦時中の隣組が、各家の生活互助の実状を顧慮すること

なく、地域的に近接しているだけのことで組織され、大変困難なことが述べられていた。それに對してある会員は中村先生のグループの報告はムラに触れていないのではないか。有賀先生の報告も同様ではないかと言うのである。

さらに、葬式組がない地域があると言うことも、運営委員会の席で確かめ、これを契機に注意することになる。そのような地域では何が葬式組に代わるものになるのであるか。それがいかなるものであれ、日常的な互助を可能にする近隣の範囲内に結ばれるものであろうが、とともにかくにも、互助的家連合にはまだまだ研究しなければならない部分がありそうなのである。

これまでイメージされてきたムラは、一体なんであるのか。それは何をモデルにしていたのか。渡辺兵力先生、川本会員などの報告し提起するムラは、何に由来しているのではないか、と想像している。というのは村の領域が明瞭なものがそれほど多くなく、そのような事例の分布は限られた地域に限定されているからである。そのような地域にはムラとイエが近世あるいはそれ以前から十分の内実を備えていたのであろう。そこにはムラとイエがある。しかし他の地域にはイエだけがあつてムラがない、そういう村落—集落の家連合があつたのではないか。

例えば岩手県の小繋村の事例である。戒能通考氏の研究によつてよく知られているのであるが、隔絶した地位をもつ地頭・親方・本家が没落した後に起こつた大きな事件であった。この事件についていろいろな説があるかもしれない。地租改正以後の法的な土地制度のもとで誰(どなた)がその村落にすむ人々の利用する屋敷地、

墓地、耕地、山林、原野などの所有権を持つていたのか。それらの土地とそれに付随する諸権利の、少なくとも名義人は、地頭である親方本家ではなかったのではないか。利用関係者は親方に對する子方として、両者の間の全体的相互給付關係の一環として山林、原野・墓地などを利用していたのであって、そこには「共有」の觀念は存在していなかつたのであるまいか。そこで多くの人々は親方本家の庇護のもとにきわめて自立性の弱い生活を営み、本家との緊密な生活諸關係は彼らの生活のほとんどを親方の家に包含させていたのではないか。それは有賀先生の南部二戸郡石神村の齊藤家の同族団のそれに酷似していたのであるまいか。そこには確かに村落があつたが、ムラが存在したのであつたか。イエは嚴然として存在していたが、ムラはどうであろうか。ある有力な家が没落して村落外へ転出したとしても、ムラが存在し機能しているとしたら、そこでの人々がどの様に対応したであろうか。

そこで改めてムラとは如何なるものなのであるか、と問わなければなるまい。内部的には生活互助の機能を営む集落的家連合であり、同時に外部に対しても連帶して対応する集団が村落であるとしても、村落リムラであるのかどうか。村落を構成する有力な家が村落外へ転出することによって、村落の構造は多少とも影響を受けることが避けがたいが、そこへ外部からの影響が加わつても直ちに大混乱が起ることになるかどうか。村落がある種の制度体であり、そこに居住し、あるいはそこでの土地を利用するのであれば、準拠しなければならない成文化したか、慣行化したかの規範体系があり、その体系を創造し、維持・管理し、運用においての論点を取り上げて調整し、多くの構成員の合意を取りまとめる機構を用意していた

としたらどうなるか。そこでは村落構造を激しく動搖させ、あるいは解体に追い込むほどの事態は避けられたのではないか。いまかりに、そのような制度体をムラであるとすれば、村落にはムラといエをそなえたものと、イエがあつてもムラがないものがあつたことになるのではないか、と考えている。前者には川本会員のモデルの経験的指示対象が、後者には南部二戸郡石神の齊藤家の同族団が当たるのではないか。

そこでイエがなくてムラがあつたと言う村落があつたか、どうかである。これについては有賀先生が深い関心を持っておられた。彼は内藤、川口両会員の鹿児島県や天草、五島の家族や村落の報告に強い関心を示していた。それに愛知大学グループの志摩漁村研究にも触れておられた。島しょや半島に位置する漁村の中には、それぞれが特殊な固有の漁法をもち、外部から入村してもそれを学習することが困難であり、村落内婚率が高く、それぞれのイエがあつてもその境界が曖昧であつたりした。それに地形的にも外部から隔絶していて、外部とのつながりを一本化せざるをえないなどがあつた、という事例がある。慎重に検討する必要はあるが、これなどは、ムラはあつたがイエがない、あるいはイエが乏しいという村落事例かも知れない。このような三種型の村落がそれぞれの地域にどの様に分布していたか。彼らは今後の課題になるであろう。

それらの多くは次第にイエとムラを持つ村落の方向に收れんしてきたのであるが、長谷川会員があげた事例が今日なお存在しているのである。近世の藩制村の中にも「村」として簡単には一括しがたい内実を備えていたものが相当多く存在していたであろう。それらが次第に「換地」村落のモデルに接近しながら、近代を迎え、そ

れらが「部落」をモデルにする村落に接近して今日に至るのである。それでもそれぞれの村落はその成立事情に規定されるし、何よりも構成単位のあり方によって規定されるのであろう。そして政治と生活との各時代においての相互規定が、そこから鮮やかに読み取ることが出来るかも知れないのである。

イエとムラを二かける二として四つのセルをつくると、最後にイエもムラもないセルが残るが、これは現実的ではあるまい。しかし以上の三種型(?)は考慮に値するのではあるまい。同室の柿崎会員は夜半すぎに私の話を聴いてくれて「大胆だなあ!」と苦笑しておられた。

このほかに、大山地区の農協スーパーが印象的であった。大きくて豊かな品揃えは、全体社会が「都市化社会」であることを象徴する。それは地域の人々の日常的な意味での情報センターである。なるほど、部落には「井戸端会議」——古典的な意味での情報創造機構?——が衰退したわけである。長野県豊科町でも同様であり、部落はこのままでは人々の生活表現の場でなくなるわけで、家族全員がオク様からソト様にかかり、銘々がサイフ!それなりの「自由」をもつ時代になつたことを痛感したのであつた。

会員の皆様、会員でない方々からいろいろと教えていただいたことが、とてもとても多い。ご芳名をあげなかつた諸先生からのもののがきわめて多い。そのことについてはご海容をお願いする。